

劇団 H A S C A P (ハスカップ) の挑戦

「知的障がい者、劇団を立ちあげる」

金田一 仁志

知的障がいを持つ若者だけで「演劇」は出来るのだろうか？

演劇的手法を使った表現教室(アクティビティ)をやっている僕のところ、「チャレンジキャンパスさっぽろ」から連絡があったのは、もう一年以上も前だ。障がい者の自立・生活訓練を行う二年制の事業所なのだという(写真1)。パンフレットには「高等養護卒業生や青春期の障がい者が、将来自立した豊かな生活を営むための訓練や支援を、ゆったりのんびりと自由に楽しく受けられる通所施設」とある。通所、なのだからたぶん自宅から通ってくるのだろう。自力で？とすれば知的障がい者といっても



写真1 「チャレンジキャンパスさっぽろ」の紹介パンフ

社会に合わせた行動は出来るわけで…そう、知りたいのは生徒たちの「障がいの程度」である。

他者(役を演じる者同士)とのコミュニケーション、それも人前で取ることが出来るのだろうか？演じるということへの理解度は？

たしかに僕の通っていたオホーツク紋別の小学校には「はまなす学級」(今で言う特別支援学級)があつて、卒業の年の学芸会に彼らは芥川龍之介の「蜘蛛の糸」を上演した。そこには幼なじみのYちゃんがいて、凝ったツクリの舞台装置(地獄)や、蜘蛛の糸を手でたぐってゆくYちゃんの(パントマイムの)動きをよく覚えていた。しかしそれは先生のナレーションと音楽に合わせてYちゃんたちが動く、いわばお遊戯の類だった。

今回のミッションは大きく違う。知的障がい者だけで、演劇を「上演」するのである。キツカケを外さずに演じることが出来るのか。そもそも台詞(セリフ)を介して作品の思いを伝えることが…。

ご存知のとおり、ダウン症や知的障がい者の多くは言葉が不明瞭だ。しかし演劇であるからには観客の心に届

く明確な台詞が言えなくてはならない。それにはどのような訓練が有効なのだろうか？

わからない。考えてもわからないことは、そう、やってみるのが一番である。

僕はすぐにチャレンジキャンパスにOKの電話をかけた。ほどなく担当のOさんという女性がやってきて打ち合わせとなった。すぐさま生徒たちの障がい程度を訊く。Oさんの答えは「人それぞれ」とのこと。こりや現場に行ってから考えるしかないな…。

最初に断っておくが、僕はハンディキャップを持つ者に偏見がない。カッコつけているわけではなく、前述のはまなす学級のYちゃんはじめ、家の近所にはたくさん障がい者がいたからだ。三軒とりのS君は片足が不自由(なのに自転車に乗るのが大好きで、よく行方不明になり近所をさわがせた)。高校時代アルバイトで世話になった板金屋の社長(僕は工業高校)は聾啞者だったし、立ちあげた学生劇団には知的障がい者のK君がいた。第一僕の母親は子どもの頃の水の事故が原因で片耳が聞こえない。

僕の子どもの頃は障がいのある者もそうでない者も同じコミュニティに居て、一緒に学び遊んだ幸せな時代だったのだ。

だが同じ頃、障がいを持つ者を健常者(正直好きな言葉ではない)から遠ざける動きが都会では始まっていた。施設の多くが都心から離れた場所に造られたのだ。

このままでは街中から障がい者が消える。

同じ時代を生きる「仲間」としての障がい者の日常を、子どもたちは目にすることのないまま成長する。「思い

やる心」はどうなる？

札幌の民放テレビ局が立ち上がった。テレビマンたちは番組を通して、彼らの問題意識を道民につきつけたのだ。しかも日曜の朝九時。一週間に一度の休みの日の、のんびりしたい朝に、画面から障がい者…。局内でも反論があったことは容易に想像がつく。

しかしSTVという放送局はそれをあえて敢行。キャスターは「上を向いて歩こう」で有名な、あの坂本九さんだ。日曜朝九時と九さんをかけて、番組名は「サンデー九(きゅう)」となった。

放送初回から、僕の目は釘つけである。北海道のさまざまな地域で暮らす障がい者のもとを九さんが訪れ、取材をし、自らの言葉で視聴者に語りかける。とりわけ(何回目の放送だったかは忘れたが)「どうして障がいを持った人たちを遠くへと追いやるのでしょう？ だれだつて(とし)をとれば障がいをもつのに」という言葉は心にささった(四〇年以上も前の話をこんなにスラスラ書けるのがその証拠である)。

近所にあたりまえのように障がい者がいて、その環境下で育った僕の思いは完全に九さんとリンクした。あの番組と、そして九さんが自分に与えた影響が大きかったことは間違いない。

余談だが、その頃赤面症を直そうとはじめた演劇もとでテレビに出演するようになった僕は、STVで「サンデー九」の元スタッフらと出逢う。二〇年以上続いたレギュラー番組が終了しフリーとなった僕に、現在の番組(毎週金曜、STVテレビ「Sチョイス」)の仕事を紹介してくれたのもその方々だ。出逢いは偶然ではな

かったと思っっている。

話をチャレンジキャンパスに戻そう。学校は札幌市の白石区にあつて、南郷通りからもその姿を見ることができ(写真2)。

一階は事務所、三階は作品等の製作を行うアトリエで、そのまん中、二階のワンフロアーが今回の稽古場だ。間口四間、奥行き二間半のスペースがとれる。地下鉄東札幌駅徒歩五分、市内の演劇の稽古場としては一等地と言つていいだろう。

初授業の前に、一階で施設長とお話をさせていだいた。当時は高等養護を出たあとの子どもたちの「もうすこし学んでいたい」という思いを満足させる施設がなかった。だったら自分たちで作ろう、と親たちで設立したのが、母体の「にじいろ福祉会」なのだという。

週間スケジュールを見た。月曜から金曜までの週五日。朝九時半からの三〇分間は「健康」。健康状況のチェックと軽い運動をしてミーティングに入る。一〇時半からは「各プログラム」となつていて、さまざまなお話やゲームが用意されている。お昼をはさみ午後一時から九〇分の授業。そのあとのミーティングで一日が終わる。年



写真2 「チャレンジキャンパスさっぽろ」は3階建てのビル

間行事も目白押しだ。地域のお祭りへの参加はもちろん、サマーキャンプにハロウィン、修学旅行はなんと東京デイズニードだ。とにかく外に出て健常者の目に触れ、一緒に活動する。なんとアクティブな知的障がい者集団か。

気になったので日常生活訓練等にかかる費用(つまり月謝)についても訊いてみた。障がい者自立支援法の自立(生活)訓練事業の活用で、ひとり月額一万円程度で済むとのこと。週イチで何かの塾に通えば消えてしまふ金額で、一ヶ月学び合うことが出来る。…夢のような施設である。

今回「演劇づくり」にトライするのは、ここの生徒たちだ。

時間になったので、稽古場への階段を登った。ドアを開けると、そこには二〇名の生徒が僕を待っていた(写真3)。

ちなみに僕のレッスンをメニューに「知的障がい者用」というプログラムはない。

しかし児童劇団や、子ども向けの講座も長く担当してきた。参加者の障がいの程度を知るためにも、まずは親と子のコミュニケーションゲームからスタートしようと思う。

写真4は二人一組のロシアのゲーム「パバ ママ ジャバ」。リードする方が「ジャバ!」と言ったら相手は親指を食べられてしまうので(ジャバは悪いカエル。映画「スターウォーズ」のジャバザハットも、ここから取つたに違いない)、すぐに指を引っ込めなければならぬ。わずか一分間のゲームだが、稽古場は笑いの渦と

化した。すてきな笑顔のメンバーばかりだ。

僕は平成七年から三回、演劇公演の為にロシアの地を踏んでいるので、両国の文化についても触れたのだが、どうにもリアクションが薄い。知識をひけらかす(?)のはさつさと止めにして日本のゲーム「どじょうニヨロニヨロ」に入った。ウケた。人は楽しいから笑う(キャノン||バード説)と、笑うから楽しい(ジエームズ||ランゲ説)は両方とも正しい。それぞれの笑顔に大笑いとなった(写真5)。しかし先ほど同様、板書(表情筋と心の関係等の話をした)になると、生徒のテンションはガクンと下がる。

とはいえ楽しい「ゲーム」だけの授業では演劇づくりは出来ないし、稽古に導くにはどうすれば



写真4 「パパ ママ ジャバ」で楽しむ生徒たち



写真3 ホワイトボードを使い授業を進める僕

いいだろうか…。とりあえず第一回は笑いの中で終わった。

二回目は詩の朗読を入れてみた。言葉に感情をこめる。しかし最初から原子修の現代詩というわけにも行かず、笑いながら(肩ひじを張らずに)声を出せる内容の物を選んだ。まだ・みちおの「おならはえらい」と、谷川俊太郎の「おならうた」である。

感触はよかった。だから三回目はそれを発展させ、群読へとコマを進めたのだが…。

群読には北原白秋の「おまつり」を選んだ。九〇分の授業にはピッタリのレッスンで、小学校でやると実にウケが良い。皆で重い「みこし」をかついだイメージでもっと大きな声で!と元気にやって見せたのだが、僕の大声を聞いたとたん、一人の女の子が教室から出ていってしまった。

大きな声が怖いのだという。こまった。舞台では大きな声で、明確に台詞を言わなければならない。

ウィリアム||ギブスン作「奇跡の人」のアニメ||サリバン先生のように生徒たちに身体丸ごとぶつかって行くのは、まだ早いかもしれない。だが公演という目的に近づくためには授業(稽古)スタイルを早く確立しなけ



写真5 自分の右手がどじょう。表情筋を動かして変顔を。

れば…。

以降は大きな声にこだわらず、言葉をしやべりながら身体を動かしたり、谷川俊太郎の「ことばあそびうた」をリズムに合わせて読んだりした。「大声」から「明確な発声」にシフトしたわけだ。

試演会（公演）の日程も決まった。平成二九年三月一八日だ。演目は李錦玉作「三年とうげ」。全員に台詞が当たるように脚色、群読とした（写真6）。

だがどうしても「イメージ」を言葉や身体で表現することが出来ない。「なだらかな山」と「けわしい山」を絵で描いて、即興でダンスをつくった。若い頃に学んだモダンダンスのレッスンを思い出し、稽古に取り入れたのだ。

舞台装置は中央の木の切り株だけ。その上に立ったり腰かけたり、そのまわりをまわったりで舞台を進行させていく（写真7）。

さて公演となれば劇団名が必要だ。前述のOさんは「一回で公演（障がい）を持つ者とわかる名前がいい」と言う。

僕は「ハンディキャップを持つアーティストたちが札幌でチャレンジ（校名でもあるし）するアート・プロジェクトだから…」と頭文字をホワイトボードに並べた。すると：H・A・S・C・A・P、何と「ハスカップ」である。きびしい北海道の大自然の中で、たくましく自生するハスカップと、障がいを持ちながらも現実社会を生きぬかねばならぬ生徒たち。この二つのイメージがピタリと重なった。劇団ハスカップ、誕生の瞬間である。

立ち稽古に入った。しかしおじいさん役のAさん

は「怖くて丸イスの上に乗れない」という。しかたがない。大きめの四角い台を切り株とし稽古を進めることにした（写真8）。

僕がチャレンジキャンパスに行けるのは、せいぜい月に三日。しかし行くたびに全体のテンポが速くなっていて努力のあとが見える。一五分しかかっていた作品が、今は一五分だ。僕にほめてもらいたい一心で、陰で稽古を積んだのだろう。しかし明確とは言いがたい台詞を早口でしゃべったらどうなるか？

「お客様に何を伝えたいのか？」を、もう一度確認し、キチンと台詞を言うように指導した。

だが一度スピードアップした「三年とうげ」は、なかなかもとは戻らなかった。

うれしい出来事もあつ



写真7 この丸イスを使って切り株をつくる



写真6 「三年とうげ」読み合わせ風景



写真8 木の切り株は四角い台になった



写真9 「えいやらやあ」と楽しく歌い歩く村人たち



写真10 チャレンジキャンパスの生徒は稽古を休まない

た。村人役の数人が「えいやらえいやら えいやらやあ」と楽しそうに歌い、歩くシーンが二ヶ所あるのだが、あの「大きな声が怖い」と外に出ていった女の子が、このシーンを観るために教室に戻ってきたのだ。それどころかいつの間にか村人にまじっていつしよに歌っている！どうやら大きな声に慣れたようだ。スタッフには「公演に出たい」と言っているという(写真9)。

あいかかわらず進んだり戻ったり稽古だが、ふと気がついた。チャレンジの若者たちは稽古を休まない！「健康管理も役者の仕事、カゼをひいたりケガしたりしないように！」と言った手前、僕もカゼで休んだり出来ないが、それにしても二〇名が毎回稽古に顔をそろえると

は立派なものである(写真10)。

今回は「発声訓練」を徹底できなかった(大声を怖がる生徒が居ることも知らなかった)。しかしこの集中力があれば、次回はきつと「大きくて明瞭な台詞」に挑戦できると信じている。

残念ながら本番はこの原稿が活字になったあとなのでリポート出来ないが、彼らなら、きつと立派に人前で演じられるだろう。

そして更に高い目標を持ち、翌年の公演に向かって進んで行こうと思う。

札幌の新しい劇団「ハスカップ」。北海道の演劇界に、彼らは新しい風を吹きこんでくれるに違いない。